

教会会報

いずみ

復刊第27号

『わたしたちの信仰告白』
出版記念号

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集: 愛宕町教会・総務部 発行者: 北 紀吉 発行所: 甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことは

信仰とは、御言葉に聴くこと

聖書 ローマの信徒への手紙 第十章八b〜十七節

牧師 北 紀吉

と云っています。

ここに言います「信仰の言葉」とは何でしょう。それは、教会が礼拝において語っている言葉のことを言っています。教会が礼拝において語っている御言葉こそが、「信仰の言葉」なのです。教会が公に言い表しているのは、「神がイエスを死者の中から復活させられた」との信仰の宣言です。主イエス・キリストの十字架と復活による神の救いをこそ教会は宣べ伝えているのです。

神は、主イエス・キリストをもつて私ども人間の救いを成し遂げてくださいました。ですから、パウロは言うのです。神は、「御自分を呼び求めるすべての人を豊かに恵みになる」、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」と。救いは、神の憐れみ、神の恵みなのです。人が何らかのを持て勝つて得るものではありません。ですから信仰もまた呼び求める方のことを聞くことなしには始まりません。「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がいなければ、どうして聞くことができる」とパウロは

言います。そして「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と絶唱します。福音を告げる者に勝って美しい者はないのです。教会の宣教の業ほどにこの世に美しい業はないのです。

神が、主イエス・キリストの十字架と復活をもつて私ども人間の救いを既に成し遂げてくださいました。その救いに私どもは、その通りですと信じ受け入れることで与るのです。ですから大切なことは、神の救いの御業を聞くことですし、聞いて信じることです。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」と言われている通りです。

教会は、神の救いを託されています。主イエス・キリストの言葉を託されているのです。福音宣教に勝つて麗しいものはない、美しいものはないのです。

★

この度、私も愛宕町教会は、「わたしたちの信仰告白《2》」を出版いたしました。《1》を出してからはや2年、ようやくにしての完成です。《1》を出すにあたって役員会で大いに議論を致しました。出版については牧師のみ反対。説教は、聖なる空間で語られ、聖霊が聞く者に臨むのだと反対したのです。

しかし、「北牧師が赴任しての最初のルカによる福音書の講解説教により、わたしたちの信仰が整えられ、明確にされたの

であり、このまま失われてはならない」と言うのです。そのほか、大ききや販売にするかどうか等々、激しい議論がありましたが、「愛宕町教会の信仰告白」として出版することとなりました。語られた説教を時間と労力を惜しまず、原稿起こしをしてくださった兄弟姉妹の労に感謝の外ありません。

今回の「いずみ」は、「信仰告白」出版記念号として発行することとなりました。原稿起こしをくださった方々の労苦と恵みと戸惑いの声をお聞き下されば幸いです。何よりも、この説教集を、ことのほか喜んでくださった方々の声も掲載させていただきました。多くの方々の支えとなり慰めとなったことを知り、関わった者たちの大きな喜びとなりました。多くの方々が感謝を持ってお読みくださったことは、私も一同にとつて存外の喜びです。読まれた方々が日ごろから御言葉を切実に求めておられればこそ、と思っています。

★

あらためて、「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉に聞くこと」によって始まる」との御言葉を与えられました。救いの恵みに与った群れとして、私も愛宕町教会は、託された「信仰の言葉」をこれからも精一杯に宣べ伝えて行きたいと思えます。

関わってくださった方々、お読みいただいた方々に神の恵みと平安とをお祈りいたします。

パウロは、「信じる者すべてに義をもたらすために」律法が与えられている(4節)と言った後で、信仰義認(救い)は、「わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉」を受け入れることによ

これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。□でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、□で公に言い表して救われるのです。聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かに恵みになるからです。「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っています。実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。

受洗にあたって

信仰告白

信仰告白



荻野 望

ぼくは、生まれる前から教会学校に通っていました。ぼくの家は、三代前からのクリスチャンで、教会で神さまのお話をたくさん学んでいました。だから、ぼくは四代目のクリスチャンということになります。

ぼくは、いろんな人たちが洗礼を受けて、神さまのもとで働くのを見ていて、自分もいつかこの人たちのようになりたいという思いがありました。中でも、すごいと思って尊敬していたのは、おじいちゃんでした。

ぼくのおじいちゃんは、いつも聖書を持っていて、神さまの御言葉をたくさん聞いていました。ぼくには、詩編27章の4節の御言葉を、聖句として選んで

くれました。

また、前は教会学校の校長先生で、いつも聖書のお話をしていました。ぼくは、おじいちゃんのように心から神さまを信じられるようになりたいと思っていました。

そんなおじいちゃんが、今年1月11日、神さまのもとに旅立っていきました。ぼくは、おじいちゃんの納骨が済んでしまわないうちに、洗礼を受けて、おじいちゃんに報告してあげようと思い、今年のイースターに洗礼を受けることにしました。

洗礼を受けたあとは、神さまの子どもとなって、おじいちゃんのような立派な教会員となるために、日々勉強を進めていきたいと思っています。

教会の人たちには、これから、ご指導をよろしく願います。

(二〇一四年四月二〇日、
イースター礼拝にて受洗)

証詞・感話

2012年2月23日 祈祷会

証詞

神の手に導かれて



石橋 茂美

2012年の祈祷会での証しは、本来であれば2013年度に「いずみ」を発行し掲載すべきでしたが、発行に至りませんでしたので、一年遅れとなりましたが、今年度の掲載となりました。寄稿いただいた石橋茂美姉、弓田仁美姉には、掲載が遅れましたことをお詫びいたします。

人の手の業をすべて封じ込め、すべての人間に御業を認めさせられる。

(ヨブ記37章7節)

数ヶ月前、ヨブ記37章7節を読んだ時、過去のある一場面が、頭の中に、ずっと浮かんできました。それは、私が、神様と出会った、神様の手に掴まれた瞬間の光景です。神様は、私の手の業を、手だけでなく全ての業を封じこめて、その上で私に出会って下さったのです。

今から丁度20年程前、私は、統一協会を脱会しました。その前の年の11月に、両親、家族、親族を巻き込んで、沼津にある

マンションの一室に隔離され、説得を受けていました。統一協会に入信する時、マインド・コントロールされ価値観をめちゃくちゃにされました。私が入っていたのは、一年半位でしたが、頭の中は、統一協会の理論が全てでした。家族の言葉も信用せず、その時信じていたのは、統一協会の上司の言葉だけでした。

家族によって、マンションに閉じ込められて、24時間監視されて、しばらくすると統一協会に反対する牧師(反牧)がやって来ました。その一人が北先生でした。統一協会の中で反牧の教育というのがあって、捕まっ

たら反牧がやって来て改宗を迫られる、その時相対してはいけない、と教えられました。北先生を見た時は、まさしく聞いていたイメージの通りの反牧だと思い、とても恐かったのをよく覚えています。風貌も声も大きくて、容赦なく捲いたてて、今皆さんがご覧になっているそのままだです。

でも、そうすると、聞くまい聞くまいとしても、頭に入ってきました。どちらが正しいかということは、少し考えようと思えばすぐに分かることなのです。考えさえすれば分かるはずなのですが、考えることができませんでした。

私は、割とすぐに、人を信じ込んでしまう方です。人の言葉を受け入れやすい、信用しやすい質の私が、その時は、信じるのができませんでした。それに、聞かないようにしていてもいやでも入ってくる言葉で、統一協会のことも信用することが出来なくなっていました。全く逆のことを言っているどちらの言い分が正しいのか、もう分からない、孤立無援の中で、私は頭の中で助けを求めています。誰に對してもなく助けを求めました。誰に對して求めた方がいいのか、分からなかったからです。

夢の中だったのか、ただ目をつむっていただけなのか、映像

として頭に残っているものがあります。落ちていきそうになる私を捕まえてくれた大きな手があつたのを覚えています。私がそこにある手を掴んだのではなく、落ちそうになって伸ばした手を掴んでくれた手です。私が何か信じたからではなく、その手の一方的な意志によって助けられたと思っています。その手こそ神様の手であつたと疑っていません。

その後、沼津のマンションから谷村教会に移り、牧師館に住み込みで、脱会のための学びを続けました。当時の谷村教会の牧師は川崎経子先生でした。多くの信者を脱会へと導き、その後の心のケアも含めてサポートして下さっている先生でした。

谷村教会で、数名の脱会途中にある方達と共に共同生活をしなが、日曜の礼拝、水曜の祈禱会に出席していました。長い年月を統一協会だけに捧げて来てしまったことで、自分が誤った選択をしてきてしまったこと、家族や親戚にかけてしまった迷惑を申し訳ないと思いはしても、それでも、心だけはまだ離れられませんでした。そんな苦しい思いを、同じ経験をしてきた仲間が、同じ場所にいるだけで慰められ、少しづつ、統一協会の間違いを受け入れていきました。

私は、2ヶ月半を谷村教会で

過ごし、自宅に帰りました。自宅に帰ったからといって普通に生活することも難しい日々でした。そのような中で、唯一、心の安らげる場所が教会でした。その時の私にとって教会は、家族の目から逃れる場所でもありました。

本当に心の救いを求めて教会に通いましたが、自宅近くの教会では、残念ながら、それを得ることはできませんでした。教会の中が採め、牧師の説教にも救いは与えられませんでした。

私は、罪を犯してきたという自覚の中でも、なお、傲慢であることに逃れようのないものを感じました。それと同時に、教会に救いを求めて行っているのに、なぜ、こんな思いをしななければならないのだろうと悩みました。私は、進むべき方向を神様に祈り求めました。そして、ある知り合いの牧師を通じて、母教会である伊豆八幡野教会を紹介されました。教会生活の中で、こんなに罪にまみれた私をそのまま受け入れ、赦して下さる神がおられることを知りました。私を掴んでくれた手の導かれるままに、洗礼を受けることが出来たのです。

今、私には、神様から夫を与えられ、息子まで与えられています。息子が与えられて思うようになったことが、我が子に語るように子ども達にイエス様の

御言葉を伝えたい、ということです。私自身には、何の力もありませんが、神様がそのような導き、必要な力を与えて下さる

と信じています。神様に与えられた多くの恵みに感謝し、神様に用いられる者でありたいと願っています。

2012年4月26日 祈禱会

証詞

委ねて歩む



弓田 仁美

私には4人の娘がいます。とても個性的な四姉妹です。一人つ子の私が四姉妹の母になるなんて、私自身、想像もしていませんでした。ですが、神様は私の想像をはるかに越えて与えてくださいました。

で神様が遣わしてくださり、助け、育てていただいている事に、頭ではなく、心で気付く事が出来たことで、『頑張る』から『祈って委ねて信じる』子育てに、自分育てになることができました。

時には、『この子に何故こんな試練を!?』と神様に激しく問う事もありますが、すべてが神様の御旨と信じ、委ねています。

と言つても、『聖書に聞き祈る』事を忘れ、感情に任せて見失うことがしばしばですが、

自由奔放な四姉妹と母でご迷惑を何度となくおかけすると思いますが、懲りずにお交わりをお願いいたします。

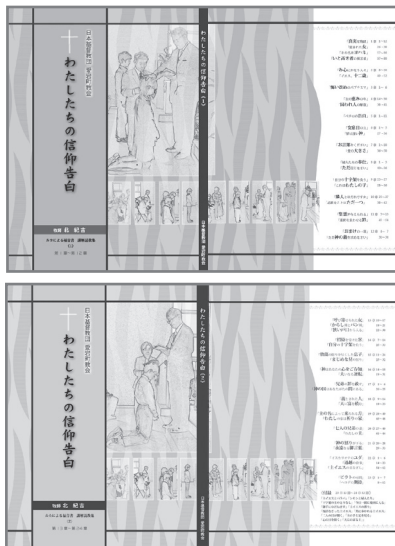
★

私自身のことになりますが、子ども達のこと一つ一つ驚きで神様のなさることの素晴らしさに驚嘆していますが、私自身に起きている出来事も、一つ一つが私の想像を遥かに遥かに越えた所に今の私が立たせていただいている事に驚いている毎日です。

20年前の自分では想像すらしていなかった、家業、青空市(生産物直売所)、梅などの食品加工品の製造販売、田畑、子育て支援センター、ダルク、様々な女性団体への参画……。何の力も能力も無い私を、それでも神様は生かし、用いてくださる……。これからどんな事が待ち受けているか、神様がどんな事に私を用いてくださるのか想像もつきませんが、神様からの『贈り物』を受け止め、祈りつつ、関わる全ての皆様の力をお借りしながら、委ねて歩かせていただきました。と思います。

★ 子ども達も、私自身も、『第一のもの』を『第一』とし、礼拝に出席出来ない時は、痛みを覚える事ができる者でありたいと思います。

最後に、三女と四女はまだ受洗に至っていません。皆様のお祈りに加えていただき、喜びの時が来たら共に喜んでいただけたら幸いです。



特集

日本基督教団愛宕町教会

「わたしたちの信仰告白《1》《2》」発刊を記念して

北紀吉牧師

「ルカによる福音書講解説教集」を読んで

神のお導きにより、2010年から始まった北紀吉牧師説教集制作の業は、2012年7月に《1》(1章～12章)を、2014年5月に《2》(13章～24章)を発刊し、愛宕町教会総務部は、主より与えられた使命を無事に果たすことができました。感謝いたします。

「いずみ」今号は、その総集編として、教会員始め関係各位から寄せられた感想文を、発刊記念特集として掲載いたします。

「主に感謝」

雨宮 三郎

ぼくにとって、教会は、いろんな友人と話ができるし、みんないい人ばかりだから、うまく言えないけど、ホームでは、えばったり怒ったりしたが、なぜか教会に来たら、いつの間にか優しくなった。

牧師さんの日曜日の説教は、聞かたび心にじんときるものがある。心にささるものがある。それは、目にもみえないもの。だから優しくなったと思います。主は、すごいなと思います。いつも感謝です。

「恵みに満ちた時、テープ起こし」

有泉美津子

御名を讚美します。

テープ起こしは思ったよりも大変な作業でした。壊れそうになるラジカセを宥めつつ、再生、巻戻しを何十回となく繰り返し、ようやく一行で上がります。まさに機を織るようにして仕上がったわけですが、今思えば本当に恵みに満ちた時でした。数学の証明問題を解くように、一語一句御言葉が解き明かされていき、聴くだけでは素通りしてしまうことも、深く近しく感じ、理解することができました。

この奉仕を通し、主の恵みによって生かされていることに改めて思い至り、ただただ感謝でした。

「み言の力」

石橋 茂美

神様のみ言には、人を生かす力がある事を実感しました。この説教を文字に起こして下さった方々の奉仕に感謝します。繰り返し読み続けたいと思います。

み言を与えられ、主の憐れみにより救われた者としての使命も、教会に与えられていると感じました。その責任に押し潰されそうな思いもありますが、それ以上の喜びを心を持って、神様の示される方に身を委ねたいです。絶対に主が共にいて下さるのですから。

「ルカ伝第2集と私」

井波 忠志

説教を記録として読むというのは余り好きではない。やはり説教は生き物であり、ご聖霊の臨在の中で神の恵みをリアルに覚えつつ涙し、深いところが揺さぶられるところにその本質があり、その感動を反すうしつつ一週間を生きたところにその本質があると考えられる。故に、第1集はほとんど読んでいない。

第2集に、いつも疑問に思っていた聖書箇所が出て来た。放蕩息子の兄である。私にとって聖書を読んでもほとんど分からない。しかし、兄にも神の方が近づいて下さった、共に喜ぶ者になろうと、いざなうて下さった。感謝。何という神であろうか。少し説教が聞けるようになったかなと思つて二年足らず、もう少し前から聞ければとも思うが、神の時であろう。この説教集は、このように歩みの遅い者に歩調を合わせてくれる。企画して下さった兄姉に感謝申し上げる。

「感謝」

岩下 和生

すばらしい説教集の完成を心から感謝致します。北牧師の説教は難しく理解できないところも多い私です。また聖書を読むことも少なく、これでもクリスチャンなのかと思うことの多いことを反省します。まだ全部を読むことは出来ていませんが、礼拝の中で

「このことは覚えておきたいと思います」と言われている御言葉が生き生きと語られていることがしつかりと伝わってきて、心洗われました。

ご奉仕して下さった方々に感謝します。

「許せない私」

荻野 淳子

弟の帰宅を喜べない兄。聖書のこの箇所を読む時、私はいつも、「これは私だなあ」と感じてきました。子どもの中から親や教師の言葉に従い、大人になってからも（それほど）はめを外すような事もなく生活してきました。まじめなのか、単に安易で安全第一なのか。ですから、人の自分勝手な行動を見ると、つい怒りの気持ちが生まれてきます。特に自分に近い人程、「私はこれだけやっているのに」という思い、兄と同じ気持ちが出てきてしまいます。

今回説教集を読み、落ちぶれた弟と同じ様に、弟を許せない兄にも父の愛が注がれているということを感じました。どの様な生き方をする人間をも等しく愛してくださる神に感謝。

改めて考えるきっかけをくださった、説教集に感謝します。

「途中まで読んでみて」

清岡 健

6月末までに全部読まない、と急いでいましたが、読んでいる内に、ゆつくり味わって読みたいと思うようになりました。なので、途中まで読んだ感想について、まとめたいと思います。

御言葉に対して、説教が膨大であることが印象的でした。御言葉の一字一句を、大切に大切に見つめなければ

いけないという姿勢と、御言葉を分かり易く正確に伝えたいという想いが膨大な説教を生み出していると思います。巻頭言に「ただただ神の栄光が表されますように」とありますが、約十人以上前の説教から神の栄光を伝え続けている一人のキリスト者の存在を改めて考えさせられました。

残りの説教も味わって読みたいと思います。

「感想を」

河野 和彦

36編からなる説教集の全編に目を通したわけではありませんが、最初に読んだのは「放蕩の限りを尽くした息子」です。有名なたとえ話なので説教でも何回かは聴いているはずですが。最初に出会ったのは、高校時代に演劇部がこれを主題に演じたときでした。クリスチャン（日下部教会員）で化学の先生が指導されたものでした。

劇中のバックに讃美歌245番「おもいはずも／はずかしや／」が流れ、節が日本古来の「今様」からとられたもので、忘れられない歌となっています。ある教会でこの讃美歌を披露したところ、私の下手な歌い方に、*「ご詠歌みたいだ」と不評でしたが。*

親から兄弟からも独立したいという弟息子の願い、それを理解の上に財産を分与して送り出した父親、弟息子はある志をもって外国へ旅立ったのだろうが父からもらった金も結果として浪費してしまっただろうが父からも弟は父の元へ帰ろうと決心する。しかしなんと行って父に会えるのか。そんな息子を送り出したときから父は祈りの中に覚えていたのだろう。変わり果てた息子の姿に、再び会えた嬉しさがこみ上げてくる。神様は放蕩息子の様な私が帰ってくるのを、愛をもって待っていて下さったのだ。

この説教集は1999年春から2001年の春まで、北先生が講壇で語られたもの。2011年4月に転入し

た私はお聞きしていない期間。じつくりと読ませていただくつもりです。

最後に、録音からテープ起こされた奉仕者のご苦勞に、感謝せざるを得ません。私も戦争体験者にインタビューして記録に残す運動に参加していますが、内容を文章にして残す場合もあり、その作業の大変さは身に覚えがあります。北先生の手書き生原稿からの文章化は、更に大仕事だったのでは！

「お言葉をください」

小林 俊子

私たちは日々たくさんの言葉を話し、また聞きます。そして、その言葉のほとんどが、話し聞いた瞬間に消えてしまいます。頂いた言葉に「足るを知る」ことができる言葉とは、正に「神からの言葉」以外にはありません。しかし、神の真実の言葉を空しくしてしまっているのは、私自身であるということに改めて知ることになりました。「神の言葉」が私たちの内に隅々にまで留まり、「神の言葉」に生きることができるよう、「お言葉をください」と願わずにはいられません。

「お言葉をください」「愛の大きさ」のテープ起こしをさせて頂き感謝しております。自らを省みる時となりました。砕かれた者として神を畏れ、「神の言葉を聴く」者へと更に変えられますよう祈りつつ、この冊子が多くの方々に読まれますように願ってやみません。

『呼び寄せられた女』を読んで」

新藤 貴夫

ル力による福音書の説教集を読んでみて、分かりやすく、非常にためになるように書かれていて、とても良かったです。

『わたしたちの信仰告白』を読んで

末木 和美

私は先ず、説教のテープを起し活字にされた兄弟姉妹方の大変な努力に対して深く感謝を申し上げます。本当にご苦勞様でした。

説教集を読ませていただいて、礼拝の時に聞く説教と、説教集を読んででは、同じ御言葉に聞いているはずなのに、自分の信仰の在り方に大きな差があることに気付かされました。礼拝での説教は一生懸命聞いているような顔をしている自分。勿論、自分に迫ってくることもあり、感動することもあります。また、涙することもあり反省することもあります。しかしそれらは、みんな自分に都合のよいように受け止め、都合のよい所にだけ耳を傾けているのではないかと考えさせられました。

説教集を読んで、その時々聖書の箇所の筋道が語られており、感動を覚えます。そして、聖書が今まで以上に身近な神さまからの贈り物として迫ってきます。改めて、御言葉に聞き、祈っていきたいと思います。

北先生はいつも、教会員のために祈り、心を砕き、取るに足りない私のためにも祈ってくださいていることを思い感謝いたします。年齢だけを重ね、神さまの御心がどこにあるのかも判っていない私ですけれども、この説教集を何度でも読んで行きたいと思っております。

最後にもう一度、この説教集が発刊されましたこと、そのご苦勞に感謝します。

『狭い戸口から入る』を読んで

竹本多賀子

「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『ご主人様、開けてください』

と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである」。

私たちは異邦人ですが、イエス様に赦されています。狭い戸口に入ることを赦され、本当に有り難く思っています。神様は私のような、なんの取り得もない者でも捕らえて下さいました。

今も足が痛くて大変です。でも、イエス様がそばにいて下さるから感謝です。

「新たな感動、再び」

中島 長續

礼拝における北先生の説教は、聖霊による神の御言葉となつて私の心に響いて参ります。

私などは時々ばばやりと聞き過ぎてしまうこともあります。高齢の故か、疲れていたためか、否それよりも前日の心の準備に欠けていたことが原因だと思っています。それ故、前日の土曜日には疲れるような無理なことをせずに、なるべく落ち着いて聖書を読み、翌日礼拝の心の準備をして祈って礼拝に出ていますことと、説教の要点をノートに記すように努めています。

説教集として出版されますと、家庭で祈りつつ時間をかけて読むことができ、再び新たな感動を覚えます。会員一同の信仰の励みとなり、また説教者の育成にもなるので、是非とも継続出版していただきたいと思っています。

「文章となった説教の力」

古屋 秀樹

長いこと望んでいた北牧師の説教集が神の計らいと多くの方々の奉仕によって完成しました。感謝です。

「わたしたちの信仰告白」というタイトルを大変意味

深く思います。それは他でもありません。私たちの教会の信仰は、ここに語られている御言葉の説き明かしによつて養われた信仰であるということを表明しているからです。その信仰を敢えて一言で言うならば「信じきれない者、罪でしかない者の救いを信じ、ただ神の憐みをいただいて生きる信仰」ということでありましようか。

北牧師が赴任してから19年、最初のルカ福音書から今のマルコ福音書に至るまで、毎週語られる説教に、神の義と十字架の福音の恵みを示され、慰められ、励まされ、また諭され、私たちは信仰を養われてきたことをあらためて思われます。

よく、説教は礼拝の場において神の臨在と聖霊の働きの下に語られるからこそ活きた価値があり、また、聞く側も神を拝し讃美する礼拝の中で聞くからこそ意味があると云います。その通りでしょう。しかし、その語られた説教が文章となった時、この説教集のように、かえって、じっくりと読むことで、語られている内容、本質を深く味わうことができるのです。

これから後、いつでも私たちはこの本を開くことが出来ます。そして、自らの信仰を、また教会の信仰をもう一度、しっかりと確認することができるのです。感謝です。

「記録された書を読む喜び」

宮崎美千代

神様のお導きで愛宕町教会に転入が許されたのは2010年のクリスマス礼拝でした。従つて、この著に記されたものは北先生の講壇からのメッセージとしては、ほとんど聴くことは出来ませんでした。

教会員として礼拝に出席できるようになり、北先生の聖書の説き明かしは、私にとって心の目が開かれる想いでした。クリスチャンホームに生を受け、教会の礼拝に出席はしていますが、これまで聖書をこれほど真剣に読ん

でいたことはありません。

北先生の語られる一言一言が新鮮でした。こうしたご本が残されて、その記録された書を読める喜びを深く感謝致しております。

テープ起こしをしてくださった兄弟姉妹のご努力にも心から感謝しております。

「偉大な作品」

望月 孝子

表紙がいい！ 自分の受洗のとき、思わず涙でぐっしりだったあの感動がよみがえります。そして主日礼拝の説教であること、とかく忘れがちなのが手元にあつて、いつでも繰り返し味読できる珍しい貴重な財産。しかも北牧師独特の名説教です。こうして活字に残されたものに、あたかも北先生の声がそのまま聞こえるような気がします。教会員の皆さんのおかげで出来上がった作品。

実は私も2007年から2011年まで4年間の穴戸俊介先生（日下部教会牧師）のルカによる福音書の講解説教を録音して2010年に整理し始めましたが、到底できる仕事ではありませんでした（これは私個人のこと、教会の奉仕ではありませんが）。それだけに心から、この成果を賞賛し感謝申し上げます。それと、独特の製本形式が聖書に似ていて素晴らしいと思います。

『私たちの信仰告白』完成出版にあたり

雪江 美也

北先生の説教を聞くことにより主イエスの恵みの豊かさ、主イエス・キリストの復活を通しての救いの確かさを絶えず与えられました。御言葉の解き明かしを通して、たどりつくところはいつも同じところなのですが、

この御言葉が日々の生活の基準となり、絶えず主イエスに引き戻されていたという思いです。現実の生活の中で見失ってしまった御言葉への立ち返りがいつも与えられました。

信じている祈りだから聞かれるのではなく、信じきれない者たちの祈りが聞き入れられている。このことが大事である。信じられない者なのに祈ることのできる恵みを下さった。「主イエス・キリストの恵み」は信じることのできない者たちに対する恵みである。これは以前、先生が話された説教での一節ですが、この説教での言葉にあるように、すべてに先立ち、主の憐れみと恵みが先行していることを礼拝の説教を通じていつも立ち返されていきました。

説教はいつもストレートな御言葉からの解き明かしに始まり、この世的な余分なことはあまり話されなかったと思います。また、同じ信仰をもつ共同体としての教会の信仰ということを特に大切にされていたと思います。信仰というものがどうしても個人的な面であらえがちな部分、信仰がかたよがりになる部分を、教会という共同体の信仰という場で公の信仰としてとらえることができることにより、個人的な信仰にとどまらず、それを超えた信仰の中にあることを教えられました。「…を忘れてはなりません！」というフレーズは北先生を思い起こすたびに私の脳裏から消えることはないと思います。

この「わたしたちの信仰告白」が、ルカ福音書の御言葉を介して、北先生の説教を通じて与えられたことを感謝したいと思います。先生の巻頭言の「ただただ神の栄光があらわされますように」、ここにすべてが語られているのだと思います。

テープ起こし等の作業の奉仕をしていただいた兄弟姉に感謝いたします。これからも愛宕町教会がこの「わたしたちの信仰告白」に絶えず立ち返り、日々祈りつつ、主の顧みと恵みを受けつつ歩んで行けたらと思います。

「すみません。でも、楽しみ」

弓田 覚志

感想文を書いて欲しい、どうしても言われてしまったので、書かせていただきます。が、すみません。まだ、『1』も『2』もばらばらとめくっただけで、読んでいないのです。ゆっくり本を読むという時間がなかなか無くて。もうすぐ来る老後に時間ができたら、ゆっくり読みたいと思います。

でも、講解説教集を読むことに関しては、とても自分自身の中で楽しみにしています。

この講解説教集は、一九九六年から始まっています。ということ、北先生がまだ四十代半ばに説教をされたということ。私の今の年齢より若い年齢です（まだ読んでいないけれど）説教をされていたというのは驚きです。私も、負けずに頑張つて日々過ごさねばと思いました。

「説教集を読んで」

渡辺 春美

今から十数年前に語られた説教を、一回一回熟読していくと、すでに聞いているはずなのに、すっかり忘れていた事に愕然としています。しかし、それがかえって新鮮で心新たに読み返す事ができ、忘れてしまっても恵みはあると感じています。

教会学校のお話を続けている私にとって、自分自身の聖書の読みの浅さを、つくづく思い知ります。聖書の御言葉の一つ一つが、こんなにも奥深く、同時にこんなにも広がりを持っているものだと、改めて思います。短期間ではとても読み通すことはできませんが、一回一回の説教を味わいつつ、楽しみながら読んでいきたいと思っています。

この説教集の出版を心より感謝致します。

清藤淳牧師（和歌山教会／愛宕町教会出身）、
田邊良三牧師（石和教会主任・現愛宕町教会担
任／愛宕町教会出身）、田邊優子牧師（石和教
会）に、ご寄稿いただきました。

「説教集刊行に寄せて」

和歌山教会牧師 清藤 淳

「わたしたちの信仰告白」完結おめでとうございます。
第1巻が出てから、第2巻が出版されるのを、首を長く
して待っております。これだけのものをよくぞ愛宕町
教会が出してくださったと皆さんの働きに敬意を表す
とともに、神さまが愛宕町教会を祝い用いてくださっ
たことを思い嬉しく思います。

僕は現在神学校卒業後17年目、42歳です。そして今仕
えている和歌山教会の礼拝では、ルカによる福音書から
み言葉を聞いています。「わたしたちの信仰告白」に収
められた説教が、愛宕町教会に取り次がれるみ言葉とし
て語られ始めたのが1996年。僕が神学校に入った年
でした。そして愛宕町教会に着任された北牧師が42歳の
ときです。あの頃は、僕もやがて北牧師のように年数を
重ねていけば北牧師のようにみ言葉を取り次ぐことがで
きるようになるのではないかと考えていましたが、そう
ではありませんでした。年齢だけは同じ所に並んだから
こそよく分かります。同じようにはならないと。

同じようにならないとは、北牧師と比べて僕が未だ未
熟で、み言葉を語る点でも不十分だという話しではあり
ません（それはそれであるのですが）。神がこの愛宕町
教会に立ててくださった説教者・伝道者・そして牧師は
北牧師なのだという事です。年数を経れば誰もが同じ
ようなことを語れるようになるというつまらない説教で
はありません。他の誰でもよかつたのではなく、神が愛
宕町教会に北牧師を遣わしてくださったのです。神が愛
宕町教会の皆さんを思い、一人一人に心配る神の行き届
いた思いを見る気がいたします。人の思いではなく、神

の恵みとしてみ言葉に養われる教会。そのようにして皆
さん一人一人を愛しておられた神をこそ証する説教集と
なりました。

「わたしたちの信仰告白」という表題の「わたしたち」。
神に愛されたわたしたちと言いつつ表すことのできる幸いな
説教集です。そうやって神に愛された「わたしたち」な
のだと福音の喜びを誰かに伝えたい、そのように皆さん
を伝道者として立ち上げらせる、力強い説教集が誕生し
たことを感謝したいのです。

「御言葉に躓くことから」

石和教会牧師 田邊 良三

主の御名を讃美します。

愛宕町教会の皆さんの手を通して『わたしたちの信
仰告白』ルカによる福音書講解説教集《2》」が出版さ
れたことを主に感謝します。この説教集がそのまま愛宕
町教会の信仰告白となつていくということが、主の御言
葉によつて立てられ、常に御言葉に聴き歩む群れとして
の教会の姿を良く現していることを見るに付け、主のな
される業は何とすばらしいものかと主に感謝せずにはい
られません。

この「わたしたちの信仰告白《2》」を読み、御言葉
に聴くに付け、あらためて主の御言葉に本当に躓くこと
の大切さを思わずにはいられません。主の御言葉に躓く
からこそ、そこで御言葉と真正面から向き合い、圧倒さ
れ、打ち砕かれ、そしてまた御言葉によつて立たされて
いく。主の憐れみ深い御手のうちで、真剣に御言葉に躓
いていきたいと願います。

これから共に御言葉に聴き、祈りつつ歩んでいきま
しょう。

「御言葉を感謝して」

石和教会牧師 田邊 優子

主の御名を心から讃美いたします。

待ち望んでいた『わたしたちの信仰告白《2》』の出
版を喜び、感謝いたします。神学校を卒業する時、牧師
となり困ることは「礼拝において他の伝道者の説教を聴
く機会が極端に少なくなるのだ」と言われました。ま
さにその意味において御言葉に飢え渴く経験をします。

しかし、主はこのような仕方で愛宕町教会の礼拝にお
いて与えられた神の言葉に共に与えることを許してくださ
り、溢れるほどの御言葉を与えてくださったことを感謝
せずにいられません。また、説教集を読み進め御言葉に
触れるたびに御言葉の豊かさだけではなく、説教者とし
ての自らの至らなさを痛感せずにはいられません。これ
からも真摯に御言葉に聴き、主を礼拝するものとして主
と教会に仕え励んでいきたいと思ひます。

愛宕町教会を主がますます豊かに恵み、御言葉によつ
て養い、導いてくださいますようお願いいたします。

感謝献金に添えてお便りをくださった皆様の声
を、許される範囲で、掲載させていただきます。
他教会員の方、また懐かしい教友が、説教集を
手に取っての感想をお書きくださっています。

◆北原葉子牧師（西国分寺教会）より

北先生、愛宕町教会の皆様

大変ご無沙汰しております。先日は佐々木兄を通し
て、「わたしたちの信仰告白(2)」をいただき、ありがと
うございました。愛宕町でルカ福音書を聴き続けた日々
を思い返し、福音の恵みの確信を築かれたことを改め
て感謝しつつ拝見しました。

編集委員長の清藤兄の「恵みの金太郎あめ」に共感し、テープ起こしの眞智子姉の感想に爆笑しつつも感銘を受けました。北先生、皆様のご奉仕の上にあります主の祝福を祈り、感謝のご挨拶を申し上げます。

(佐々木謙一兄は、現在、祈祷会に出席中の西国分寺教会員です)

《第二神》

前略 日曜日に「わたしたちの信仰告白(1)」を拝受いたしました。本当にありがとうございます。私にとって、先生のルカ講解に養われた六年は、福音理解の原点でしたので、是非手元にとりましたが、残部わずかのこと。コピーしてお返しした方がよければそうします。貴重な書をありがとうございます。



◆小宮太郎兄(関西学院教会員)より

御名を讀みたいです。

毎月欠かさず愛宕町教会の週報を御恵送いただき感謝致しております。平素何のお礼状も差し上げないままうち過しております。無礼を常々申し訳なく存じておりましたが、この度は製本早々のルカによる福音書講解説教集2を賜わり大変有り難うございました。先生のお説教を親しく拝読させて頂くことは誠に喜ばしく篤く御礼申し上げます。

最初の章を読んだだけで直ぐお礼状を書き始めました理由は、聖書の深い意味をわかり易く親しみ深く述べておられるお説教の内容の魅力に思わず引き込まれましたので、最後まで読み進んでからではお礼が遅れる懸念からでした。最初のお説教の内容で学びました重要なことは、主日に教会礼拝に集う重要性、上よりの神の支配と恵みへの信仰、神を讃美しつつ生きる信仰、を大切にしたいと思いました。このあと250ページも続く全36のお説教を宝物のように大切に読み続けることができると考えるだけで胸が弾むようです。重ねて感謝申し上げます。

私事ですが、この2月からメヌエル病の眩暈・難聴が進行して、一時は補聴器つきでも家内と筆談する状況まで悪化しましたが、幸い最近では軽くなり、近場なら杖なしで補聴器を頼りに外出が可能になりました。しかし、同窓会などの集いは全欠席です。関学教会の聖餐式主日礼拝の説教も音声は聞こえるだけで、言葉の意味が聴き取り難いのが残念です。このような時に充実した説教集に触れる機会を与えて頂きましたことは、誠に嬉しく存じます。

この説教集は録音テープから書き起こされたといいましたが、長時間に亘って奉仕された方々のご苦勞を想います。立派な装丁の冊子が完成するまで、編集や製本のお仕事をされた方々も大変だったことでしょう。また、録音テープが無い部分については先生の原稿で補われた由、伺いましたが、それらのご努力のお陰で最後までまとまりのある充実した説教集として完成されていることを喜びます。主による愛宕町教会のご教勢の発展をお祈り申し上げます。どうぞ、御教会の皆様方によりしくお伝えください。御栄えのために先生には御身をお大切にとお祈り致します。



◆内海啓司兄(桜新町教会員)より

主の御名を賛美致します。

この度は、待ちに待った「わたしたちの信仰告白」第2巻が届きました。本当に嬉しく思います。

第1巻が届いた頃、手術の養生をしており、毎日、日課のように少しずつ読み続け、こんなに励まされ、力づけられるとは思いませんでした。そして、今丁度第1巻の三回目を読んでおりました。読むほどに、神様の言葉が心にしみこんで来て、自分が生かされていることを何度も気付かせてくださいました。これから読み始める2巻が楽しみです。本当に素晴らしい信仰告白です。

北先生は、深い聖書の言葉をかみ砕いて私どもにイエス様のはからいを伝えてくださっています。自分が最も

必要としている御言葉が、愛宕町教会から届けられていること、心より嬉しく感謝致しております。

もう少し体に力がつきました時には、家内の両親の墓参りと共に、愛宕町教会での礼拝に出席させて頂きたいと思っています。どうぞ北先生に、そしてこの素晴らしい信仰告白を世に出して下さった皆様方によりしくお伝え下さい。本当にありがとうございます。感謝

(三井道子姉宛)



◆松本伸吉兄(遠州教会員)より

主の御名をたたえます。

教区総会のおり、託されました説教集「わたしたちの信仰告白(2)」を受けとりました。心から感謝を申し上げます。「わたしたちの信仰告白」を前回いただきましたとき、この続きができましたら、お知らせを願っていましたが、お覚えいただいたことも感謝です。少しずつ読み始めております。問われ、教えられ、慰められることが多くあります。先生の説教を聴いた愛宕町教会の教会員の皆さまの幸いを思います。また、説教集を読むことによって、幸いを共に与えることがゆるされ、うれしく思います。

わたしは「マタイによる福音書」を少しく丁寧に聴き始めて三年になり、ようやく26章に入りました。聖霊の導きを祈り求めて聴き、注解書に頼らず、聖書を聖書に聴くように心がけています。少しも前に進みませんが、何度と同じ段落を前後の段落に注意しながら繰り返し聴いています。おそらく、えらく主観的な聴き方になっていきますが、それによって聴くことのできたことは、主の真実と慰めの深さです。大きな感謝です。

そして、北先生の説教集からも同じように主の真実の確かさと慰めの深さが伝わってきます。ありがとうございます。主のさらなる祝福と聖霊の導きが御教会と先生とご家族の上にありますようお祈りします。

(北紀吉牧師宛)

2012年度夏期伝道実習報告

感謝

東京神学大学大学院1年（現、名古屋北教会牧師）

山田 詩郎



主の御名を賛美します。2012年7月21日～8月21日の1ヶ月間、主の憐れみによって、愛宕町教会において夏期伝道実習の機会が与えられ感謝申し上げます。愛宕町教会の皆さまが、牧師になろうとしている者に訓練の機会を提供しようと、日曜日の講壇、聖書研究祈祷会、家庭集會を明け渡し、時と財と力を神様に献げてくださったことは、本当に有り難いことでありました。そのようにして1ヶ月間、未熟な者にお付き合いくださって感謝の念に堪えません。

実習が始まる前から愛宕町教会の夏期伝道実習は厳しいとの噂を耳にしていました。夏が近づいてくると東京神学大学の学生の間では、「誰が愛宕町に行くのか？」という心配が始まります。ひとつの風物詩のようになっているのです。ですから、夏期伝道実習先が発表された日には、あっという間に私が愛宕町に行くと言うことが知れ渡り、色々な人たちから愛宕町での夏期伝の厳しさについて教えられ、脅されました。しかし、昨年度、愛宕町での夏期伝を経験した中西康之さんから、実際の奉仕のことや、北先生からの指導、ご自身がどのようなことを学んだかということなどについて教えて頂き、最後に「牧師なる上で必ずよい実習になる」と励まされました。その言葉を一縷の望みとするようにして甲府に参りました。今、振り返って「牧師になる上で必ずよい実習になる」との言葉は、本当にその通りでありました。そして、これからもずっと「あの実習を与えられ良かった」と振り返り続けることになるかと確信しています。

説教、家庭集會、祈祷会の経験は御言葉を語る者となる上でかけがえのないものとなりました。日曜日の説教において、このような者が講壇に立たせて頂いているということは、畏れ多いことでありました。特に、愛宕町教会の皆さまは御言葉に対する飢え渇きが大きいので、その思いにお応えしたいと準備をしました。しかし、神様の御声を聞きたいとの思いでいても、結局は、不明瞭なことしか語れず、私自身すら、慰めを受けず、感謝し喜んで新しい一週間を始められないような説教であったと思います。そうであっても、神様の憐れみと聖霊のとりなしによって神の言葉を語らせて頂いたのだと信じます。

皆さまの御言葉を慕う思いは家庭集會にも表れていました。メッセージの取り次ぎの間、皆さまは真剣にきいてくださいました。そして、終わったあとに質問をしてくださいました（私の話が、あまりにも不明であったり、心に残らなかったりして、皆さまが何を質問したらよいかわからないということもありましたが…）。北先生からは真剣な指導と解説を頂きました。本質的な事がわかっていないで語っているのだということを、繰り返し教えられました。

これらの経験を通して分かったことは、御言葉を神の思いではなく、自分の思いで語ってしまっているということでした。それは、聖書の言葉の一つ一つが語っている神の恵みではなくて、自分が聴きたいと思っている願いであったり、律法主義的な「こうでなければならない」という道徳であったりしました。

このような誤ったメッセージを語ってしまうことの根本には、神の言葉を聴こうとしないわたしの罪があり、また自ら

に徹底して絶望しておらず、主の憐れみを受けなければ生きられない者であるということが分かっていないということがありました。神様の恵みを受けた者として、主にひれ付することこそ、本当の解放であり、救いでもあります。しかし、自尊心や自己讃認の思いが邪魔をして、自分が崩れることを恐れてしまっているのです。神の前に徹底的にへりくだれない。ここにわたしの不自由さがあります。それは、祈祷会やCSの礼拝でこの1ヶ月聴き続けた旧約の民の姿と重なるものです。神様から何度言われても、どんなに救いの業が大きいかわけられていても、聴き従うことができず、人間の思いにしがみついているのです。北先生から、このことを繰り返し指摘されました。この課題を携えて、残りの東京神学大学での備えの期間を過ごしたいと思います。ダルクの方々のミーティングに陪席させて頂くことがありましたが、そこでは、自らの過去や現状をありのままにお互いに語り、弱さや罪の告白がなされていました。そのような姿に、私に欠けているものを得るヒントがあるように思います。

畑仕事をするとは、ほとんど初めての経験でした。どれが雑草で、どれが食べられるものなのか、見ても分からないので、食べられるものを傷つけてしまったことが何度かありました。やっているときは暑くて、疲れるのですが、土を触り、体を動かしていると、いつの間にか心はリフレッシュしていました。このようにして食べるものが与えられていることを体感し、神様の創造の恵みに感謝するようになりました。

皆さま、メッセージに対して率直なコメントをくださったたり、どんな説教を語る牧師になって欲しいかという思いを語ってくださったりありがとうございました。また、いつも食事をご準備くださってありがとうございました。差し入れもありがとうございました。おかげさまで来たときよりも、体だけは大きくなったことがわかります（牧師としての成長は年月を経て、結果がでるでしょう）。今後、桃とぶどうを食べる度に愛宕町のみなさんと実習のことを思い出すことになるでしょう。

北先生、一ヶ月間ご指導くださりありがとうございました。他では聴きえない、しかし、牧師となる上で知っておかなければならないことをたくさん教えてください、また考えるヒントをいくつも与えてくださりありがとうございました。「（北先生のように）できない」と聞き直ることも傲慢な罪だとの指摘を受けました。人を新しく造りかえられる神様に依り頼みつつ、教会の伝道と牧会のあらゆることを考え、想像し、実行していける、クリエイティブな牧師になりたいと思います。

眞智子さん、食事を初め、たくさんのお世話くださり、一夏を共にしてください、ありがとうございました。CSのみんな、たくさん遊んでくれてありがとう。

最後に、天の神よ、愛宕町教会の夏期伝道実習の業をお守りくださり感謝申しあげます。どうぞ、この群れ、お一人お一人にあなたにある平安を賜り、憐れみのもとに置いてくださいますように。すべてはあなたの御名が崇められ、御国を来たらすためにお用いください。主イエス・キリストの御名によって、アーメン。